

《研究ノート》

『四言語対訳小辞典』(1705) における

ラトヴィア語名詞の性別

ードイツ語借用語の場合ー

田 中 研 治

要 約

18世紀初頭に編纂された『四言語対訳小辞典』に収録されているラトヴィア語の中には、多数の中期低地ドイツ語借用語が含まれている。本稿では借用語として定着したドイツ語名詞が、どのような性別交替を示すかを調査する。今回対象とするのは「手工業と職人」関連語彙である。

0.

1201年にリガの町がドイツ人たちの手によって建設されて以来、ラトヴィア語とドイツ語との言語接触の歴史は長くて根強く、また多様である。かつて度重なる東方植民により、またハンザ都市の発展とともに、バルト海沿岸一帯のドイツ語圏が隆盛を誇っていたころ、ラトヴィア語に取り入れられたドイツ語借用語の数は極めて多数にのぼる。その最盛期は16-17世紀だといわれる。ここでいうドイツ語とは主に中期低地ドイツ語のことである。従って、ラトヴィア語の発達史、特にその語彙面においては低地ドイツ語の顕著な影響は重要な言語変化の要因ともなっている。

*2002年11月11日受理。

以下においては、18世紀初頭に編纂された『四言語対訳小辞典』を資料として、そこにみられるドイツ語借用語を原型とするラトヴィア語名詞の性別を調べる。できるだけドイツ語原語に溯ることにより、その当時ラトヴィア語語彙として既に定着していた借用語の性別が、ドイツ語原語の性別とどのような異同を示すかを調査することが本稿の目的である。

1.

17世紀から18世紀にかけて、ラトヴィアでは様々な種類と規模のラトヴィア語と他言語との対訳辞典が出版された。編者は生粋のラトヴィア人よりもむしろ外国人、特に当時社会的、文化的に極めて深い関係のあったバルト系ドイツ人が多く、中でも聖職者による編集、執筆が目立っている。『四言語対訳小辞典』（以下、『小辞典』と略称する）には著者名は記載されていないけれども、この『小辞典』の場合、出版に関連する背景的事情と収録語の調査から判断して、著者は当時リガで牧師の職にあたりボリウス・デプキン（Liborius Depkin, 1652–1708）だとする見解がラトヴィア言語学では伝統的に通説化し、広く支持されている。¹

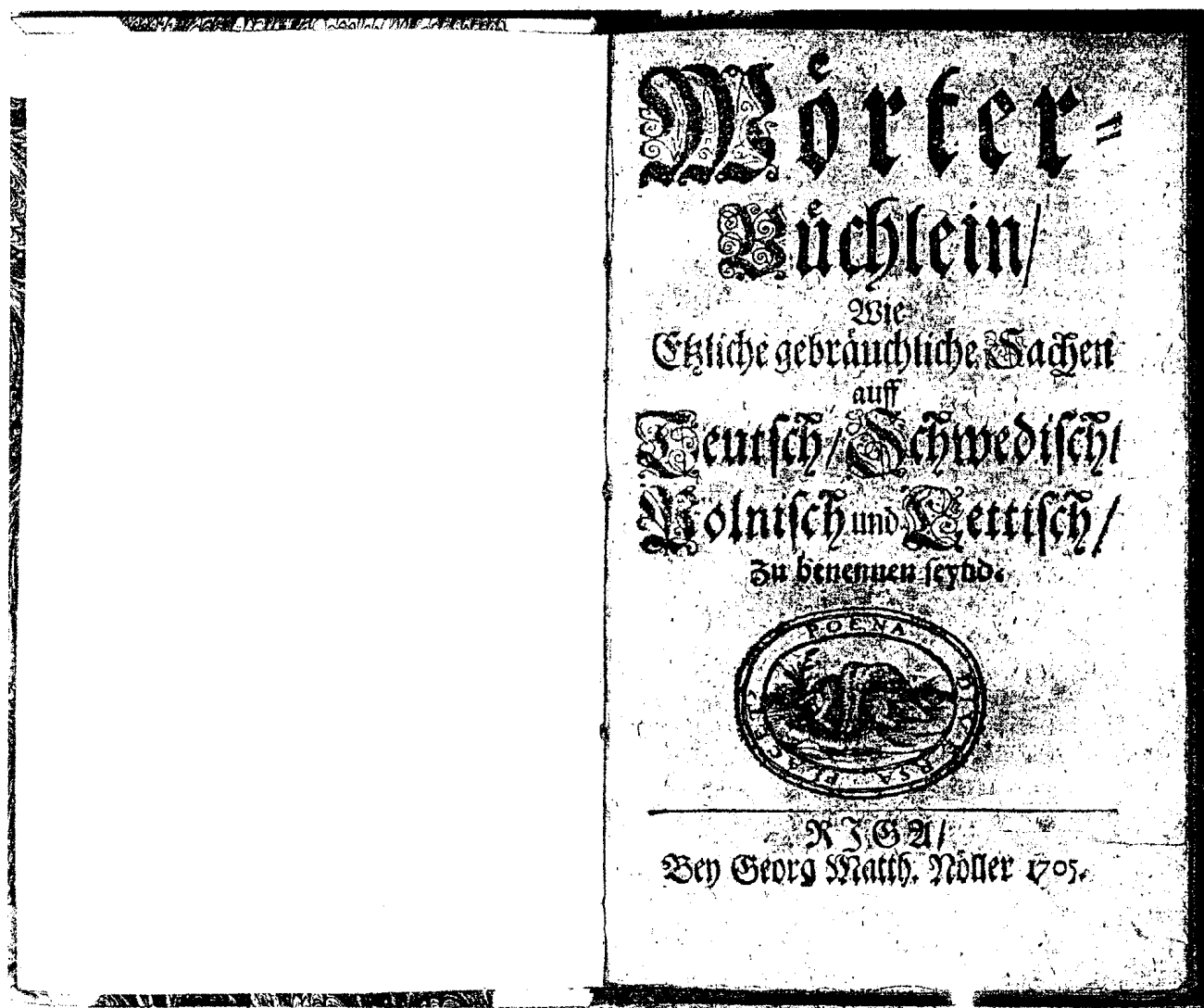
この『小辞典』は1705年にリガのネラー（Nöller）出版所から刊行された辞典であるが、名称のとおり四言語（ドイツ語、スウェーデン語、ポーランド語、ラトヴィア語）の見出し語を対照させて並記している。収録語の品詞は主に名詞であるが、日常語として使用されていた語句がほとんどである。収録語の総数はわずか1233語であるが、それらの配列方法は今日の常態的なアルファベット順ではなく、24の概念グループに分類され²、さらに各グループ内では意味分野に準拠した語の配列となっている。

1999年にこの『小辞典』のファクシミリ版がストックホルムの Memento 社から出版されたおかげで、原典の使用が極端に制限されていたこれまでの状況

Vārdnīcas pirmais atvērums, mazliet samazināts.
Title page, slightly diminished.

[0]

[1]



『小辞典』の表紙

[36]

[37]

Die Büchse	Bysa
Die Salbe	Smörjelse/ Salwa
Der Kraut-Kraut	Krydkramare
Die Waggeschall	Wäagskaal
Das Gewicht	Wagh Wicht
Die Krankheit	Siukdom
Die Taubheit	Döfheet
Die Blindheit	Blindheet
Der Husten	Hosta Hostsiuka
Das Fieber	Stälfstuka
Die Pestilenz	Pestilenz
Der Fleck	Fleck
Die Kreuze	Scabb/ Klada
Die Maffeln	Meßlinger / Barna
Die Häule	Bula
Das Geschwür	Böld / Säar
Das Leben	Liiff
Der Todt	Död
Von den Handwercks-Leuten	
Om Handwärcs Soll.	
Der Handwercks Handwärcs Man	
Das Handwerck/ Handwärc	

Puská	Lee Aptrekeru Kahre
Másc	pinai
Korzenik	Tahs Salves
Waszki	Tas Sahlu Bohd-
Wagá	necks
Chorobá	Swarra-Kausant
Głuchotá	Tas Swars
Slepotá	Lee Swarru Altmint
Káfel	Ta Neweffeliba
Febrá	Ta Kurliba
Powietrze	Ta Alkiba
Zmáza, Krofty	Tahs Klepus
Swierzbaczka	Ta Drudse
Ospá, Kur	Tas Mehris
Guz	Sarkanas. Sihmes
Wrzod	Tas Kafchis
Zywoť	Tas Maffles
Smierć	Tas Trims
	Tas Augons
	Ta Dühwoschana
	Ta Nahwe

O Rzemiesnikach.

No Ammatneekem.

R Zemiesnik
RzemiesłoZ As Ammatneeks
Zas Ammat
C3 Mlyn

『小辞典』の36～37ページ

とは違い、だれでもこの『小辞典』を身近において調査できるようになったことは喜ばしいことである。

ファクシミリ版を編集したのはラトヴィア大学教授でバルト言語学者のペーテリス・ヴァナクス (Pēteris Vanags) である。この『小辞典』をさらに深く理解するための手引きとして、ファクシミリ版の後半には Vanags による詳細な解説文 (この『小辞典』成立の歴史的背景と、言語的特徴が中心) が20ページにわたって記載されている。

2.

『小辞典』に収録された四言語のうち、ラトヴィア語に関していえば、その収録語は大きく分けて二つの種類がみられる。即ち、本来のラトヴィア語と他言語からの借用語である。借用語の中でも、中心となる借用源は上述のとおり中期低地ドイツ語である。

本稿ではドイツ語からの借用語が比較的多く含まれていると思われる「手工業と職人」(Von den Handwercks=Leuten) 関連の語彙を中心にとりあげる。ファクシミリ版テキストでは25ページから32ページまでに相当する。その部分には約150語のラトヴィア語の単語が収録されており、他の概念分野と比較して全体的な語彙数が多い分野である。本来ならば、この『小辞典』の収録語彙全体を見渡したうえで、ドイツ語借用語を抽出すべきであるが、それは今後の継続的な調査の課題とし、今回は手初めに上述の分野のみを取り上げている。

この『小辞典』の特徴の一つは、ドイツ語とラトヴィア語の全ての語彙には性別を示す定冠詞 (ドイツ語) と指示詞 (ラトヴィア語) が添えられているということである。

例えば、ドイツ語では三性を示す *Der*, *Das*, *Die* という定冠詞が添えられ (*Die* は三性共通複数もありうる)、一方、ラトヴィア語には指示詞 (かつて

は冠詞的な機能を果たすこともあった) *Tahs* (= *tās*) [女性・複数・主格]、*Tee* (= *tie*) [男性・複数・主格] (どちらも ‘*those*’ の意味)、そして ‘*that*’ に相当する *Tas* (= *tas*) [男性・単数・主格]、*Ta* (= *tā*) [女性・単数・主格] が添えられている。

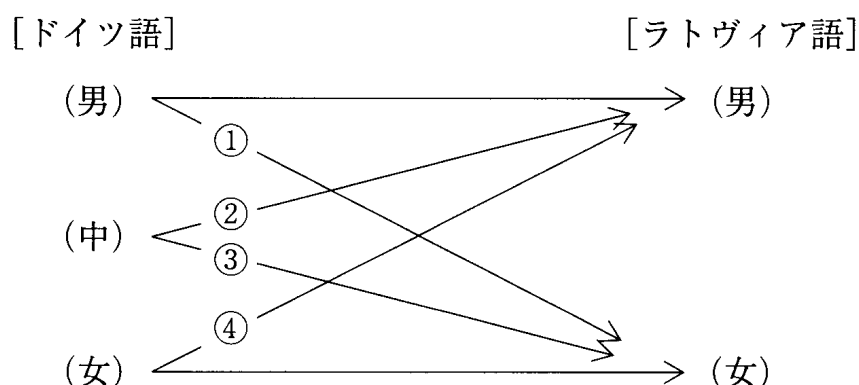
3.

「手工業と職人」関連語彙の中には30数語のドイツ語借用語が含まれていると考えられるが、以下においてそれらを対比的に提示する。

以下の諸例を調査するにあたり、筆者の念頭にあったのは、三性（男女中）言語であるドイツ語の単語が借用された場合、二性（男女）言語であるラトヴィア語ではどのような性別の異同を示すのかという極めて単純なことであった。

ドイツ語の男性名詞、女性名詞は、そのままラトヴィア語でも男性、女性を示すことが多いだろうということは予測できたが、問題は中性名詞が結果的にどちらの性別に置き換えられているかが筆者の関心事であった。

具体的には次のような両言語における性別の対応関係が考えられる。



この図において問題となるのは、①～④の性別交替である。以下において、①～④のグループ別分類に従って例をあげる。

原型となる（と思われる）中期低地ドイツ語の語形は Vanags が解説部分で引用している語形を基本とするが、その性別は表示されていないので、それに

については Lübben & Walther (1888; 1980[復刻版])、Sehwers (1953)、Jordan (1995) を参考にしている。また、Lübben & Walther などにおいて語形の記載はあるものの、その性別表示がない場合は、現代ドイツ語に関する性別情報などをもとにして判断した場合もあることを付け加えておきたい。また、これらの文献で語形の一致が見られない場合は、Vanags による語形を引用する。

『小辞典』の配列言語順にならって左側に原型となるドイツ語を、スラッシュの右にラトヴィア語化された借用語形を並べることにする。この分野の関連語彙の中には、厳密に職人名だけでなく、彼らが使用する道具や、原料名、製品名なども含まれる。

ラトヴィア語の右の [] 内に示すのは、この『小辞典』の中に対訳語として収録されているドイツ語である（高地ドイツ語と思われる。17世紀までに、低地ドイツ語地域の都市のほとんどが低地ドイツ語に代わって、高地ドイツ語を公的言語として採用したという言語事情が背景にある。原語形のまま引用）。

ほとんどの場合、語義が共通しているので、それを《 》内に記載するが、両言語で少し語義のずれが見られる場合は、それぞれの単語に語義を添えている。なお、ラトヴィア語語彙の記載にあたっては、この『小辞典』独自の文字形態もあるため、印刷上の便宜を考慮し、一貫して Vanags による現代語的表記を採用した。ラトヴィア語単語に付加された指示詞（前節末で示した4種類）は以下のリストでは省略し、その代わりに（ ）内に性別を表示した。

以下の例では、いうまでもなく (男)、(女)、(中) はそれぞれ性別を示すための簡略表記である。番号に☆印をつけている単語は、現代語においてはもはや使用されていないもの（即ち、語史的に全く別な単語で置き換えられるに至った語例）である。³ 同様に、*印をつけた単語は、現代語において語形が少し変化したものである。⁴

① (独：男) →→ (ラ：女)

(1) hövel (男) ≪鉋(かんな)≫／ēvele (女) [der Hobel]

(2) līm (男) ≪膠(にかわ)≫／līmes (女・複数) [der Leim]

* (3) nagel (男) ≪釘≫／nagle (女) [der Nagel]

② (独：中) →→ (ラ：男)

(4) ammet (中) ≪手工業(組合)≫／amats (男) [das Handwerck]

(5) pick (中) ≪ピッチ、瀝青≫／piķis (男) [das Pech]

(6) plāster (中) ≪舗石≫／plāksteris (男) [das Pflaster]

☆ (7) glas (中) ≪ガラス≫／glāznieks (男) ≪ガラス職人≫ [der Gläser]

☆ (8) rēde (中) ≪乗馬用馬具≫／rēdinieks (男) ≪馬具職人≫ [der Riemer]

③ (独：中) →→ (ラ：女)

* (9) schapp (中) ≪戸棚≫／skape (女) [das Schaff]

④ (独：女) →→ (ラ：男)

(10) mūre (女) ≪外壁≫／mūris (男) [die Maur]

上例以外の次の語彙はすべて (独：男) →→ (ラ：男)、(独：女) →→ (ラ：女) の例である。

(独：男) →→ (ラ：男) の例：

(11) brūwer (男) ≪ビール醸造業者≫／brūveris (男) [der Bierbrauer]

(12) māler (男) ≪塗装職人≫／mālderis (男) [der Mahler]

(13) möller (男) ≪粉挽き職人≫／melderis (男) [der Müller]

(14) schröder (男) ≪裁縫師≫／skruoderis (男) [der Schneider]

(15) schinke (男) ≪(豚の)もも肉≫／šķinkis (男) [der Schincke]

☆ (16) haneken (男) ≪樽の栓≫／āņķins (男) [der Hancke]

☆ (17) balbēr (男) ≪床屋≫／balberis (男) [der Barbierer]

☆ (18) bū(w)meister (男) ≪建築業者、棟梁≫／būmeisteris (男)

[der Baumeister]

☆(19) dreyer (男) ≪木工轆轤(ろくろ)職人≫／dreimanis (男) [der Dreher]

☆(20) kannengēter (男) ≪鋳物職人≫／kannģieteris (男)

[der Kannengiesser]

☆(21) reepsleger (男) ≪ロープ製造職人≫／rieplģēgris (男)

[der Rehpschläger]

☆(22) sniddeker (男) ≪指し物職人≫／snģkeris (男) [der Tischler]

☆(23) timmerman (男) ≪大工≫／timmermanis (男) [der Zimmermann]

☆(24) wever (男) ≪織物職人≫／vģeveris (男) [der Weber]

(独：女) →→ (ラ：女) の例：

(25) klģe (女) ≪ふすま、糠≫／klģias (女・複数) [die Kleien]

(26) kelle (女) ≪左官用こて≫／mģrnieka ķelle (女) [die Mauerkelle]

(27) spģle (女) ≪糸巻きリール≫／spuole (女) [die Spule]

(28) vģle (女) ≪鑢(やすり)≫／vģle (女) [die Feile]

* (29) kģde (女) ≪鎖≫／skģde (女) [die Kette]

* (30) tange (女) ≪鋏、ペンチ≫／tange (女) [die Zange]

* (31) sage (女) ≪鋸(のこぎり)≫／zģģe (女) [die Säge]

* (32) sģde (女) ≪絹(糸)≫／zģdes (女・複数) [die Seide]

☆(33) verwe (女) ≪色彩≫／vģrves (女・複数) [die Farbe]

4.

(独：男) が (ラ：女) に交替した例は33例中、3例しかない。また、(独：女) が (ラ：男) に交替した例は1例のみである。中性名詞そのものの数が少ない中で、(独：中) が (ラ：男) になっているのが5例で、(独：中) が

(ラ：女)に交替しているのが1例のみである。わずかな例からだけでは納得できる説明をすることは難しいが、中性名詞はどちらかというラトヴィア語では男性名詞になる傾向があるように推測できる（なお、9番の例 *skape* は18世紀の時点では女性名詞になっているが、最終的に現代語では *skapis* という男性名詞になった）。

参考のために、『小辞典』の「教会」(Von der Kirchen und Kirchensachen) 関連語彙、「学校」(Von der Schule) 関連語彙、「男女別と血縁関係」(Von den Geschlechtern und Verwandtschaften) 関連語彙、「戦争と軍備」(Vom Krieg und Kriegs-Zurüstung) 関連語彙に含まれるドイツ語借用語（総計32語）を簡単に調べた結果、やはりドイツ語中性名詞はラトヴィア語男性名詞に分類されている場合が数値的には比較的多いようである（もちろん女性を示す場合も一部混じっているが）。また男性・女性間の性別の相互交替は、上述の四分野の関連語彙を調べた限りでは皆無である。

上例からも明らかなように、《～業者、～職人、～師》などの多数の職業名がドイツ語から借用されて、当時すでに定着していたが、当然職業そのものもドイツ人の移住と共にラトヴィアへもたらされたことを考えれば、その名称の性別[男性]は例外なくドイツ語を踏襲するものである。即ち、ドイツ語の形態論的な性別表示語尾に準拠して語彙借用が行われたことが推測できる（例：-er で終わるドイツ語行為者名詞[男性]が一貫してラトヴィア語でも -eris で終わる行為者名詞[男性]になる）。上例(7)《ガラス職人》、(8)《馬具職人》が男性なのは、ドイツ語の原則（職業名詞＝男性）からの類推と考えられる。

上例中、(独：女) →→ (ラ：女) のグループに属するドイツ語名詞は全て語尾が -e で終わっている。これも職業名と同様、意味的な基準によるよりも、むしろ形態論的基準の呼応といえるであろう。即ち、-e で終わるドイツ語女性名詞はラトヴィア語名詞の女性表示語尾 -e とも共通するという理由で、(25) から(33)の女性名詞はそのままの性別で借用された可能性が高い。このように、

ドイツ語名詞の性別が変更されずに借用された理由は、ラトヴィア語側が主体的に性別を決定したというよりも、むしろドイツ語側の形態的必然性が作用したためであろう。これは中性名詞の性別決定よりもはるかに容易で機械的な選択であった。これはラトヴィア語側においては、いわば「無標 (unmarked)」の選択で、同時に言語経済の観点からしても、《効率のよい》方法であったといえる。

以上、「手工業と職人」関連語彙におけるドイツ語借用語33語を検討したのであるが、33語のうち、(独：男) →→ (ラ：男) で対応する例が14例あり、(独：女) →→ (ラ：女) で対応する例が9例、そしてなんらかの性別交替がみられる例が10例ある。全体として約150語中、ほぼ5分の1にあたる33語がドイツ語からの借用語であるということになり、そのうちほぼ3分の1が性別交替を示す。いうまでもなく、借用語数と性別交替は、他の特定の概念分野においてはまた違った結果を示す可能性は否定できない。

特に中性という言語的性別をもつドイツ語名詞をラトヴィア語に借用する際、語形と語義は比較的容易であったものの、中性という性別をストレートに借用することは必然的に不可能であった。これはかなり強力な、避けがたい言語的制約である。従って、本来中性を示す借用語に関して、男性か女性かどちらか一方の性別を決定する意識が当然働いたわけで、それはラトヴィア語側における、いわば「有標 (marked)」の性別決定意識だったといえるであろう。

また、これらの借用語が、その後現代語へと移り変わる過程において、再度性別を交替するようになった例も多くあることから (例：上掲の(9) *skape* → *skapis* や、(31) *zāģe* [女性] → 現代語 *zāģis* [男性] のような場合)、そのような借用語の性別決定を左右する種々の言語的、心理的要因に関する考察は、通時的にも共時的にもラトヴィア語の性表示体系 (gender system) の解釈に不可欠であろう。

今後同様な方法で、18世紀という時代を背景として出版されたこの『小辞典』

の他の概念分野に関する借用語を分析することにより、単に借用語の性別交替という問題だけでなく、それ以外の当時のラトヴィア語の語彙面における特徴を、言語変化や言語発達の観点から捉えることができるかもしれない。また、そのような語彙面における言語的特徴の背後に纏わり付いている何らかの生活文化的要素や、当時の社会的動向なども、見逃し得ない重要な副次的側面であると思われる。

ファクシミリ版の編者 Vanags も解説の部分で次のように述べて、この『小辞典』のもつ言語資料的意義を強調していることを最後に紹介し、この研究ノートを終えたい。

「1705年の『小辞典』に見られる同義語、古語、そして借用語などは、17世紀から18世紀にかけてのラトヴィア語語彙の発達を考察するための豊かな情報源となっている。それらの語彙は当時のリガやその周辺における言語的变化の過程、即ち中期低地ドイツ語の影響下、二言語使用のなかでラトヴィア語が発達したことを特徴づけているのである。」⁵

註

1. 例えば、Zemzare (1961:108ページ) は、『小辞典』の写真に添えた説明として、「デプキンの...小辞典 (1705年)」と書いている。また、この『小辞典』のファクシミリ版編者 Vanags も Depkin を著者とみなしている。

Depkin 自身は生まれも、育ちもラトヴィアであるが、父親も牧師で、その家系はバルト系ドイツ人だったようである。Vanags (1999) 69ページに簡単な説明がある。

2. 24の概念分野は次のとおり。数字は便宜上筆者が添えたもの。(2)以下では「～に関する語彙」の訳語部分は省略する。(ドイツ語は原文のまま引用。)
 - (1) Von Gott und Geistern (神と靈魂に関する語彙)
 - (2) Von dem Himmel und der Welt (天空と世界)
 - (3) Von der Seelen und Sinnen (精神と感覚)
 - (4) Von dem Leib und seinen Theilen (身体とその部位)

- (5) Von der Kirchen und Kirchensachen (教会と教会関係物)
- (6) Von den Ehren-namen (尊称のための添え名)
- (7) Von den Geschlechtern und Verwandtschaften (男女別と血縁関係)
- (8) Von der Schule (学校)
- (9) Von den Kinderspielen (子供の遊び)
- (10) Von der Kauffmannschaft (商人)
- (11) Vom Krieg und Kriegs-Zurüstung (戦争と軍備)
- (12) Von der Apotek und Kranckheiten (薬局と病気)
- (13) Von den Handwercks=Leuten (手工業と職人)
- (14) Von dem Hauß und Haußgerähte (家屋と家財道具)
- (15) Von der Kleidung (衣服)
- (16) Von Speioß und Tranck (飲食物)
- (17) Von den Fischen (魚類)
- (18) Von den Vögeln (鳥類)
- (19) Von den Thieren (動物類)
- (20) Von den Garten=Gewächsen (庭と植物)
- (21) Von den Bäumen und Früchten (樹木と果物)
- (22) Von dem Ackerbau (農業)
- (23) Von dem Ungezieffer (有害動物)
- (24) Von den Metallen und Steinen (金属と鉱物)
- Beysaß (=Beisatz) (追加)

3. ☆印のついた語の現代語形を次にあげる。いずれの語においても、かつてのドイツ語借用語との性別交替は見られない。

- | | | |
|--------------------|---------------------|-------------------|
| ☆(7) stiklinieks | ☆(8) seglinieks | ☆(16) mucas krāns |
| ☆(17) bārddzinis | ☆(18) celtnieks | ☆(19) virpotājs |
| ☆(20) kannu lējējs | ☆(21) virvju vijējs | ☆(22) galdnieks |
| ☆(23) namdaris | ☆(24) audējs | ☆(33) krāsa |

4. *印のついた語の現代語形を次にあげる。()内は性別交替を経た現代語の性別を示す。
無表示は、『小辞典』中の借用語の性別と同一であることを意味する。

- | | | |
|----------------|------------------|-----------------|
| * (3) nagla | * (9) skapis (男) | * (29) kēde |
| * (30) stangas | * (31) zāģis (男) | * (32) zīds (男) |

なお、これらの語の借用源に関しては異論もみられる。一例をあげれば、*nagla* の場合、Karulis はその『ラトヴィア語語源辞典』(1992) において、古アイスランド語を借用源と

みなしている（第1巻：614ページ）。本稿では Vanags の判断に従い、これらの語彙の借用源は中期低地ドイツ語と考えておきたい。

5. Vanags (1999) : 83ページ

参考文献

I. 原典（ファクシミリ版）

Vanags,P.(ed.)1999. *Wörter=Büchlein / Wie Etzliche gebräuchliche Sachen auff Teutsch / Schwedisch / Polnisch und Lettisch / Zu benennen seynd.* (Facsimile edition.) Stockholm: Memento.

（註：上記タイトル中の文字「はsで置き換えた）

II. その他

Jordan,S. 1995. *Niederdeutsches im Lettischen.* Bielefeld: Verlag für Regionalgeschichte.

Karulis,K. 1992. *Latviešu Etimoloģijas Vārdnīca.* (vol.1 & 2) Rīga: Avots.

Lübben,A./C.Walther. 1888. *Mittelniederdeutsches Handwörterbuch.* Leipzig.(Reprograf.Nachdruck, Darmstadt:Wissenschaftliche Buchgesellschaft:1980)

Rūķe-Draviņa,V. 1977. *The Standardization Process in Latvian—16th Century to the Present.* Stockholm: Almqvist & Wiksell International.

Sehwers,J. 1953. *Sprachlich-kulturhistorische Untersuchungen vornehmlich über den deutschen Einfluß im Lettischen.* 2. Aufl. Berlin:Erich Blaschker.

Zemzare,D. 1961. *Latviešu vārdnīcas (līdz 1900. gadam).* Rīga: Latvijas PSR Zinātņu Akadēmijas izdevniecība.

Summary

A Note on the Gender of Latvian Nouns Recorded in *Wörter=Büchlein* (1705): With Special Reference to German Loanwords

Kenji TANAKA

This note deals with the lexical loans of Middle Low German origin, focusing primarily on the gender alternation of their Latvianized nouns all belonging to the vocabulary of craftwork recorded in the 1705 *Wörter=Büchlein*. The gender assignment of the original German neuter nouns in particular must have posed a notional process of irregular and novel gender alternation to the native Latvians, a detailed research of which, however, is yet to be carried out.